

# “思春期の旅”を 支える中学校に

「明るくて素直で聞き分けがよくて、そんな子だけがいい子なのか？ 誰がそんなこと決めたんだ？」。山田洋次監督の『十五歳・学校Ⅳ』での少年の言葉は、いまでも多くの中学生の胸にあることだろう。

激しい時代の変化のなかで、中学校も変容している。いじめ自殺が中学生に多い理由の背後にはストレスフルな日本の中学校の現実がある。揺れ、惑いながら自由に伸びようとする思春期と、過度に競争的で管理抑圧的な中学校教育とのミスマッチはすでに限界を超えているように見える。過密と無味な学習に追いつく「学力競争」と、その風圧で失われる自治活動や文化行事が中学校教育を痩せ細らせている。中学教師もまた教師であることの喜びや感動を奪われ、過労と孤立に心身を蝕まれている。

「兄ちゃん、十五歳か。ええなあ。ええ旅しいや」。『学校Ⅳ』で家出した少年をトラックに乗せてくれた運転手が言う。思春期はロードムービーに似ている。どんな人に、どんな学びに、どんなできごとに出会うかが人生を形づくる。

激しい自立への欲求を渦巻かせて、中学生は問い、試し、反抗する。だから中学生は悩ましく、小憎らしく、おもしろく、愛おしい。

中学生を育てる教育観を問い直し、本質的な中学校教育のあり方を考察したいと願う。なによりも中学生の声に耳をすませてみたい。中学生の躍動する生气と可能性を明らかにしてみたい。「ええなあ、中学生」そんな思いがわいてくる中学校をつくりたい。